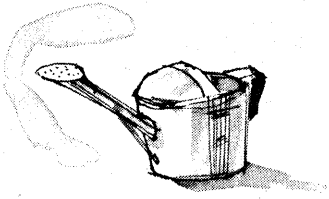
ある三歳児とその周辺

川崎千束

はじめに

Hは身体的に標準以下で出生し、かつ人工栄養児である。満四歳に達した現在でもまだ平均値に追いつけない発育状態ではあるが、扁桃腺炎で発熱するほかは、たえずからだを動かして遊びまわり機嫌よく元気である。しかし母親は彼の食事の摂取量が少ないことを口癖のように愚痴っていたので、集団生活の経験をもつまでは食事の真のよろこびを味わえないでいたように思われる。

父母、祖母、Hと四人の家族構成で、彼は長子であり現在のところひとりっ子である。祖母はHの育児は両親の義務と責任にあるべきだという基本的な考えに立って、両親の育児の方針について、とかくの口を入れないよう自称しているが、Hが発熱すると両親は時々意見が対立し、祖母の判断を求めにくる。父親は典型的な子煩悩であり、母親は保育科で机上の勉強だけはしたという経歴をもつものである。



人工栄養児であるためか、Hは二歳近くまでは母に抱かれるよりも祖母に抱かれる方を好んだ。母はやせ型であり、長子を抱くという未経験さから何となくぎごちなく、祖母は三人の子を育てたので抱き方にもなれと柔らかさがあるのであろう。彼は感覚的にそれをとらえて、むずがって泣く時も祖母との触れ合いを好んだ。感覚的なものがまず発達するということを祖母は承知していながらも、Hのこの

現象は心をかすめる不安なものであった。人工栄養児と若い母親とのこの関係は、Hの情緒の発達に支障をきたすことはないだろうかと。しかしこれは杞憂にすぎなかった。知能の発達につれ彼の愛の対象は母、父、祖母という順位に変わっていった。

祖母が反対した二つのこと

祖母が両親のやり方に断固として反対したものが二つある。

一つは歩行器であり、一つは描画に対する考え方である。彼が歩き始めた時、人手のないこともあって母親は夕食の支度時、または掃除洗濯の間など歩行器に入れるようになり、日を経るにしたがって入れる時間が長びいてゆく傾向になった。祖母が帰宅した時、喜んで近づいてくる歩行器のガラガラという音をきく度に、祖母は足かせをはめられた奴隷を思い浮かべてたまらない気持になった。歩行器から抱き上げ抱きおろすと、三足四足安定しない歩き方をしては転んだ。

〝これでよい〟祖母は断固としていった。

歩くということは、足をふんばり腰をささえ、歩いてはころびころんでは立とうとする。立って一歩をふみ出す努力と、忍耐と試行とが人格をつくり上げ、知恵をはぐくんでゆくのである。歩行器は安全そうであっても、その安易さにたよってかえって精神的な不安定を招くものである——と。

倉橋惣三著作集にあるミレーの第一歩についての先生のお言葉も引用して母親を説いた。

これは素直に受けいれられ翌日から彼はドタンバタンと歩く生活に変わり、ころぶ時、手をつくという知恵もわき出た。(歩行器から出したばかりは手をつくということを知らなかった)

描画の場合は、歩行器のように簡単にはゆかなかった。Hは一歳半近くになりクレヨンをにぎって、いわゆる掻画を描き始めた。誕生ごろはまだクレヨンをなめて困ったので、しばらくクレヨンを取りあげておいたが、くちびるがおもな触覚器でなくなった時機を見て再び与えたのであった。掻画がなめらかなぬたくり画に変化してゆくのを祖母はそれとなく見守って、順調らしい発達を内心喜んでいた。ところが壁にはった包装紙に描いていたぬたくり画が、描かれなくなったことに気付いたある日曜日、父親とHがう

たいながら何か描いている。時々父親が歌の文句につまると、母親が台所からとび出してきて口を添えている。うたうにつれてかえるが描け、猫ができ、はてはコックさんが描き上がる。この方法をかなりやったらしく、時々うたうよりも手の方が先行している。〝うたと一緒にこんなものばかり描かせてはだめ。この絵は死んでいる。壁の包装紙に描いたのは、ぬたくりでも生きている〟と祖母は強く反対した。

〝喜んで描いているのだからいいじゃありませんか〟父親は子どもが喜びさえすればいいと考えている。〝だめだめ。思う存分にぬたくりをさせなきゃ。おとなの模倣をさせて何になる？〟〝模倣？　子どもというものは模倣からはいって経験をひろげてゆくものでしょうが〟と父親は珍しく反撃してきた。

〝おばあ様はそういうけれど、才能開発だの、英才教育だのって毎日のようにテレビ番組は迫ってくるし、私たち母親は迷うばかりです〟と母親は涙声になる。説得力のない祖母は口をつぐんでしまったが、大いに心にひっかかる問題であった。幸せなことにそれから間もなくNHKTVで子どもの絵をとり上げ、久保貞次郎先生を登場させ、描画方法の賛否を答えられる番組があった。

久保先生　〝子どもの絵に技法が先にはいってはだめです。子どもの心がはいっていない絵、そんな絵は子どもに描かせたくない〟

この久保先生の力強い言葉をきいて、同じことをいっている祖母の言葉には反撥していた父親も〝うう―〟とうなずき、即刻、うたにつれて描く絵は姿を消した。あとになって、Hが集団生活にはいり、そこの指導者である木下繁先生からも〝子どもの絵を指導する時、この辺をこうしなさいとか、うさぎの耳はもう少し長いとか、手をとって教えたりすることは非常にやさしいことで、現在でもそのような美術教育が世の中のほとんど大部分をしめているが、それは子どもの絵に対するほんとうの指導ではない〟と説明され、両親の、子どもの絵に対する構えは確かなものになったが、肝心のHには長く尾を引く問題として残った。

それはHが絵というものを描かなくなってしまったことである。一度、物の形が描かれるという甘味を覚えてしまった彼は、ぬたくりでは満足できなくなり、かといって自力では物の形を表現するにいたらず、そのジレンマが彼にクレヨンを見捨てさせたのであろう。せん方なく祖母は市

販の紙粘土を買い与えた。これにはとびついて、これパン、これりんご、ねこだよ、犬だよ、ミキサー車だよ、といえるだけの言葉をいって粘土をまるめたりたたいたりしていた。しかし、その喜びも長続きはしなかった。市販の紙粘土は必要な柔軟性をすぐに失う欠点があった。二、三日もたつとポロポロとこぼれ落ち、きれい好きな母親はまゆをひそめたし、Hも感触の快さを味わえなくなった。祖母は紙とふのりで作る柔らかい紙粘土を頭で描きながら、自分の生活の忙しさにかまけ〝つくってあげるからね〟という口先だけの紙粘土で日がたっていった。

積木との出会い

そんなころ、父親がコルクの積木を買い与えた。包の中からコルクの積木が出てきた時、その色調からであろうか、初めは手を出さなかったが、父親が積んでみせ、五個六個積みあげてバランスがとれず、カタカタとくずれると声をたてて笑った。何度も何度もその繰り返しをやり、ついに、買い与えた父親の方がいかめしい顔つきになって〝明日にしなさい〟と無理無理寝室へひっぱって行った。(この積木は四歳になった今もなお、Hのよき友だちである)

やがて、積木の倒れる瞬間とか倒れる音とかを喜ぶよりも、積極的に積み上げてゆく方に関心が移行し、背丈よりも高く積み上げるのが得意になり、背が届かないと、自分の椅子を持ち出してその上に乗り、積木を持つ指先に全身の注意力を集めて息をころし、ひとつ、またひとつ積み上げてゆく、そばで見ているおとなの方が肩のこる思いである。四歳の今は、高速道路をつくり、ミニカーと取り合せてあきぬ遊びを展開している。

ちなみにこのコルクの積木の長所と短所をあげるなら、長所は1、危険性のないこと、　2、大形の方なら二歳から四歳ぐらいの家庭用積木として大きさが適当であること、　3、円形のあること等

短所としては、1、コルクの色そのものが快適でないこと　2、木の積木の触れ合うと出るあの快い音、また快い触感のないことであろう。

三歳の旺盛な試行

Hの最初にいった二語文の中で〝よしてくれ、よしてくれ〟というのがある。うちのおとな三人のいわない言葉なので不審に思っていると、ある日指先に包帯をしているの

で、〝どうしたの〟とたずねると〝よしてくれ、よしてくれしたの〟ということで、この語源が八百屋のおじさんであることが分かった。毎日母親と一緒に八百屋へ買物に行き、店頭でいたずらをするので〝よしてくれ、よしてくれ〟といわれ、その日は竹の子のかごに手を入れて指先にとげをさしたのである。時にはまた、水に浸したぜんまいをとりあげて〝みみずぅ―〟と同じ年ごろの女の子をいやがらせることもあるという。この八百屋のおじさんは口でこそ〝よしてくれ〟というけれど大のHびいきでHが母親の実家へ旅行して十日ほど留守の時、〝寂しいね〟といってHの帰宅を待ちわびたほどである。

家中の引出しという引出しはひっくり返して中味を探索するし、本だなの上だろうがピアノの上だろうが、登ろうと思いついたら、何とか工夫して登ってゆく。さすがに降りることはできず、本だなの上で悲鳴をあげている。一度は父親が置き忘れたはしごをつたい登りしてゆき、藤だなの上で声がした時は、おとなたちは肝を冷やした。ひメダカを二十匹ほど水盤に放しておくと、たちまちその中に手を入れ〝いらっしゃい、いらっしゃい！〟と威勢のよい声を張りあげてメダカ屋になっている。

〝私が太れないのは、Hのいたずらがはげしすぎるからです〟と母親はよく祖母にこぼすが、祖母もまた、大きな被害者なのである。確かに置いたと思うものがそこになく、本だなの本は毎日のように放り出され、置時計は勝手に指針がまわされている。疲労して帰宅した日など、さすがにこの惨状にたまりかねてドアにかぎをかけることにした。しかしドアの外で泣き叫ぶ声をきけばへやの中にいても心は落付かない。冷厳と構えていると、ドアの外でも泣く手はやめてからめ手で攻めてくる。

〝ぼくも勉強するの。会社のお仕事がおくれるから〟（父親はこの手で撃退している）

〝新聞屋です。お金、とりにきました〟

〝荷物、持ってきました。はんこください〟

ついに、ドアをあける仕儀になってしまって祖母の仕事ははかどらない。

友だちを求めて

Hが急にいなくなり、家の中はもちろん、四つ辻の方までさがし歩いても姿はなく、母親は蒼白になり、警察への電話の受話器を取ろうとして、ハッと思いあたり、向いの

お家にうかがってみるとHがあがり込んで、一歳三ヵ月の女の子を相手に遊んでいる。胸をなでおろしたものの、どんな方法で門のさくをのりこえたのかふにおちない。形ばかりの門ながら、Hがひとりで出られないように、父親がさくをつくりそのさくに足掛りのないように工夫もしたはずである。遊び友だちを求めて、このさくをのりこえたのであろう。一歳三ヵ月の女の子と遊ぶために。家の周囲は小学生も高学年のお子ばかりなので、これ以来、さくは取り除き、おとなたちは真剣にHを三歳保育の集団生活にいれようと、その集団の場を、あれこれと選択した。

認識や感覚の大人とのずれ

動物園のチンパンジーを見た時〝大きなおさるさん、おとなのくせにはだしでいやねえ〟といった。おとなの感覚では動物のはだしなどというものはとらえられない。水田蔵相のクローズアップの顔をテレビで見た時〝あのおじさんウルトラセブン?〟ときいた。祖母は何のことやらわからず返事をにごした。念のためあとでウルトラセブンを見てやっとHの質問が了解できた。額に見事に大きいほくろのあることが二者同一であった。

祖母が幼稚園で飼育する小うさぎをアメヤ横丁に買いに行き、幼稚園へ引き返すのもおっくうになったので、てのひらにのるほど小さい二匹のうさぎをかかえて家に帰り、そっとHに見せると、歓声をあげてとびあがり、抱かせて抱かせてとせがむので、抱かせると緊張し、宝物をかかえたようにして放さない。ようやくなだめて箱に入れさせてもすぐ抱きに行って、とうとううれしさのあまり興奮して眠らず、おとなたちは困りはてた。

翌朝、Hが目覚めないうちに祖母はうさぎを包んで駅に急いだものである。それの罪ほろぼしに母親と祖母とでHを動物園へ連れて行った。あいにくこども動物園のうさぎは、この日は小屋から出されていず、小屋のうさぎを眺める形になってしまった。〝うさぎちゃん!〟と呼びかけてはいるが先日のアメ横のうさぎにもった執着も喜びも示さない。祖母はハッと気付いた。てのひらに入れて抱いたあの小うさぎはその暖かみを通して、彼の実感として確かにとらえられ、今、金網ごしに眺めるうさぎと同一視させようとするおとなの思慮の足りなさを。結局、おさるの電車に乗って喜んで帰ってきた。

また、電車、バスごっこに夢中になって、洗濯機の排水

ホース電気器具のコード、およそ長いコードにさし込み器具のついたものを見れば、口にあてて、しゃがれ声を出して、車内アナウンスをし、次は改札係も兼任するので必然的に切符をほしがった。勤め帰りの祖母は、改札を出てから自動販売機でわざわざ三〇円の切符を購入して、Hに渡したことがある。この時、喜ぶと思いのほか、けげんな顔をして〝どうしたのおばあちゃん、車掌さんに、せがとどかなかったから渡さなかったの？〟と不審そう。倉橋先生の著作集の中にある――〝飛びついてきた子ども〟時はさっきのあの時であったのである――が思い起こされ、我が孫ですら……と祖母はおとなのいたらなさを恥じ入った。

集団へ順応してゆくプロセス

Hの集団生活への第一歩は、母親のスカートをしっかり握って離さず泣きわめいた。そこでは第一日目から、完全に母親から離し、自立させることを目標としているので、午後三時半になって母親が迎えに行った時は、泣き声はもう立てないでいたけれど、目をまっ赤に泣きはらしていたという。外向的だとばかり思っていたHも、おとなの中に育った弊をそのまま多分にもっていることをあらためて知らされた。集団生活にはいる前に、いわゆる基本的な習慣の自立はできていたつもりであるが、内面的な自己確立は、なおざりであったことを反省した。この集団は週に一日だけ出席する規約であるので、五月になってもまだ集団に溶けこめなかった。今まで、さらさら興味も関心もなかった曜日のことを気にし始め、〝明日、何曜日？〟と毎日のようにたずね、〝ぼく、金曜日、おなかが痛くなって熱がでるんだ〟といいくらしたが、母親は彼の出席日の金曜日には強引にひっぱっていった。

祖母は常に受入れる側の人間であるので、この孫の不順応ぶりにあきれながらも興味をもった。ある金曜日の朝、Hは祖母のところへきて〝おばあちゃん、喜んで幼稚園へ行くの〟とたずねた。〝喜んで行くとも。毎日、元気でね〟といい放つと、取り付く島もないといった悲しい表情になって〝ぼく、だめな子なの〟とうなだれる。祖母は自分の心ない言葉に恥じ入った。父も母も励ましの一手であるゆえ、せめて祖母だけでもと思ってきたHに対し祖母は裏切りの言葉を放ってしまった。〝おばあちゃんもね。幼稚園に行った小さい時は、泣いたこともあるのよ〟となぜいってやらなかったのであろう。せめてものことにしっかりとH

の手を握って駅までの道を同行し、折りから来た急行にとび乗った。窓からホームを眺めたら、母親のそばに、はかなげな顔をして立っていた。Hは各駅止りに乗り次の駅で下車するのである。ほどなく、集団の場から垣根をこえて脱走し、十字路まできて右か左かわからず泣いていたところを見付けられ連れ戻されるということもあり、手数のかかる問題児だと母親は嘆いた。

入園記念の写真ができ上がってきた。それを見せながら、〃これは○○ちゃん、この子のしるしはペンギン、これは○ちゃん、この子のしるしは象さん〃といった具合に、クラスの子のほとんどの名とマークを説明した。泣いているというのにどうして覚えたのであろうか。不思議に思うと同時に〃この子には脈がある。じきに集団にもなれることだろう。問題児などではない〃と祖母は曙光を見いだした。

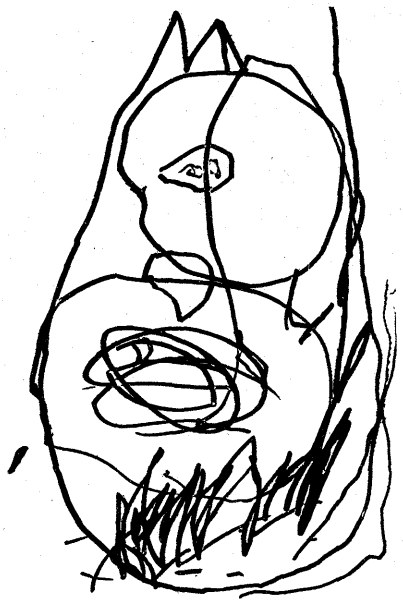
六月も近いころ、昼寝を長くしたから眠れないといって、Hは夜、祖母のへやへ遊びにきた。しばらく遊んでいるうちに、フト時計に目をつけ、三時半だといって立ち上がった。(実際は八時半)自分のいすを持ち込んで、通園時の帽子をかぶりかばんをかけていすにチョコンと腰かけた。〃おばあちゃん！　○○さん、さようなら、○○さん、さようなら、といってよ〃と五、六名、友だちの名をいうので、祖母はおうむ返しにその通りにすると、〃今度は、K・Hさん、さようならといって〃とわが名をいう。祖母はとっさに、園の降園の場を再演しているのだと気付いたので、母親をへやのドアのところまで迎えにこさせた。Hは喜んで、もう一度とせがみ、今度は父親が彼の気に入りの雨傘と長靴とを持って迎えに来たので、更に喜んだ。

このことによって、Hが集団に溶けこんだことを、祖母は、母親よりも先に知り得た。

心の奥深く育ちゆくもの

このころ、描いた絵に時計がある。彼が時間というものを知ったのは、三時半である。誰に教わったのでもない、彼自身の電波がとらえたのである。集団になれないころ、どんな思いで三時半を待ったことであろうか。とにかく彼は人生の最初の困難を克服したのである。四つ切の画用紙にポスターカラーで色とりどりの丸を描いた絵、これは心の安定を得た時描いたもので、黒い小さな丸がポツンポツンと描き添えてある。お花畑にしいたけがなっているの、と彼がその絵についての言葉である。しいたけは彼の好物

時　計



猫といってかいた絵

である。同じころに大好きなねこの絵も描いている。表現は稚拙ながら心の奥で描いているのが理解できる絵である。どれも、同年齢の子の描いたものとくらべて、そう遜色がないように思われる。してみると、Hは表現としての絵は久しく描かなかったけれど、心の中で描く絵のイメージはふくらませていたのではないか。Hが集団に順応してゆくプロセスを考えてみる時、子どもの表面にあらわれる言動が、その子のすべてではないということを知った。

祖母にとって、保育の道は、遠い雪みちのようである。踏みしめ踏みかため、遅々としてでも前進してゆかねばならない。またしても、倉橋先生に御登場を願って。

こころもち

子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れて呉れる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である。

子どもの心もちは、極めてかすかに、極めて短い。濃い心もち、久しい心もちは、誰でも見落とさない。かすかにして短かき心もちを見落とさない人だけが、子どもと供にいる人である。

（東京家政大学附属幼稚園）